

國學院大學學術情報リポジトリ

現代イスラームと日本社会：公開学術講演会

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小杉, 泰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001702

公開学術講演会

現代イスラームと日本社会

小 杉 泰

【小杉】 ただいまご紹介をいただきました小杉でございます。きょうは「現代イスラームと日本社会」ということでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

お手もとにお配りしてあるプリントに沿ってお話を申し上げてまいります。最初のところに、アラビア文字が書いてあります。これを「サラームのあいさつ」といいます。

アラビア文字は、右から左に書きます。右側の単語が「アッサラーム」、「平和」あるいは「平安」という意味です。左側の単語は二語がひとつながりに書いてあるのですが、「アライクム」で「あなたたちの上に」の意味になります。合わせて「平和があなたたちの上にありますように」を意味します。これはもともとアラビア語のあいさつですが、それがイスラーム圏に広がって、どこでも使われる「サラームのあいさつ」、相手の平安を願うあいさつ言葉となっています。

これを皆さんと一緒に声に出してみたいと思います。ご一緒にお願いします。

アッサラーム・アライクム。

【会場】 アッサラーム・アライクム。

【小杉】 とてもよかったです。ありがとうございます。

このあいさつには、返事があります。プリントをご覧ください。「ワ・アラ

イクムッサラーム」と言います。最初の「ワ」は英語でいう and です。そして、先ほどのあいさつの言葉の順をひっくり返して、「あなたたちの上にも」と言います。つまり、最初のあいさつは「平和があなたたちの上にありますように」でしたが、返事は「そして、あなたたちの上にも平和がありますように」となります。

こちらと一緒に声を出してみましょう。では、ご一緒にお願いします。

ワ・アライクムッサラーム。

【会場】 ワ・アライクムッサラーム。

【小杉】 ありがとうございます。とてもいい感じですね。

これはあいさつですので、両方でやることにいたしましょう。私が最初のあいさつをしますので、皆さんは返事のほうをお願いします。

アッサラーム・アライクム。

【会場】 ワ・アライクムッサラーム。

【小杉】 息が合いました。ありがとうございます。今度は、皆さんから、あいさつをお願いします。私は返事をいたします。

【会場】 アッサラーム・アライクム。

【小杉】 ワ・アライクムッサラーム。

ご協力ありがとうございます。とてもいいあいさつができました。

イスラーム文明は、だいたい西暦8世紀から15世紀くらいまで、ヨーロッパ文明が伸び上がってくる前の時代にあたりますが、その頃世界で最先端の文明でした。ところが日本にとっては、その時代まではあまり縁がありませんでした。イスラームが誕生した7世紀は、日本でいうと聖徳太子の時代にあたりますが、当時の日本にとって世界とは「唐天竺」で、それより西側は認識されていない時代でした。

人類の文明にはいろいろな性質があります。日本の場合、他の文明に対する吸収力が非常に高いのが特質ではないかと私は思っております。自分たちでそう言うと、少し自慢めいて聞こえるかもしれませんが。これまで私はいろいろな国や地域を見てきましたが、文明にはいくつか類型があって、他に

対して吸収力が高い文明もありますし、自分で独自のものをつくるのが優れている文明もあります。日本はわりあい吸収力の高い類型に属するかと思いますが、人類の文明の中でもイスラーム文明とは、これまで縁遠く、接触の機会も限られていました。中国や西洋からのように文明を取り入れる機会がありませんでした。もし今、「仮に一つだけ、イスラーム文明から日本に取り入れるとしたら」と聞かれたとします。たった一つと言われると難しいのですが、私は、このサラームのあいさつを推薦したい気がします。人と人が出会ったときに、まず「平和があなたの上にありますように」と言います。返事するほうも「あなたたちの上にこそ平和がありますように」と言うのですから、これはすばらしいあいさつだと思います。

なぜ、このようなあいさつが生まれたのかというと、イスラームが誕生した中東、西アジア、古代でしたらオリエントと呼びますが、このあたりは「文明の十字路」で、いろいろな民族、いろいろな人びとがやってきて、出会う場所でした。そういう中で、人間が仲よくしようと思うならば、まず敵意がないことを示すのだと思います。出会いの最初に、「あなたに平安を望みます」「私は平和がよいと思っています」と明言するわけです。こういうスタイルから交流を始める。これはなかなかうまい工夫だろうと思います。

そうであるとする、皆さんは、人が出会うだけで「平和があなたたちの上にありますように」「あなたたちの上にも平和がありますように」と願う人たちがいて、なぜ今、中東のあたりで紛争がいくつも起こっているのかと疑問に思うかもしれません。私は、政治研究をしておりますので、政治的な紛争や戦争も専門ですので、それについていろいろ説明を申し上げることもできます。ただ、今日はイスラームとは何か、イスラーム文明とは何か、現代のイスラームとは何かという話をいたしますので、あまりそちらのほうは時間が割けませんので、大枠のことだけ申し上げます。

単純化して申し上げますと、こういうことだと思うのです。まず、イスラーム世界には、近代の西洋が勃興する以前に非常に高度な文明がありました。独自の文明があって、独自の仕組みを持っていました。あいさつにしても、

まず平和を宣言するような仕組みになっていました。ところが、近代以降の世界は、西洋近代型の仕組みが世界中を覆っています。イスラーム世界がイスラーム型の仕組みで運営されていた時は非常にうまくいっていたにしても、西洋型と親和性があるとは限りません。イスラーム圏もすべてを西洋化して、西洋的に運営するならそれはそれでいいのですが、固有の文明の強さもありますから、イスラーム文明をすべて放棄して西洋型でいくというわけにもいきません。そうすると、仕組みの違いから摩擦が生じます。そのような摩擦は、どちらの仕組みがいいか悪いか、という単純な話ではないだろうと思います。人類のいろいろな文明が共存しなければならないのが、世界が一体化することの意味ですから、今の段階としては、異なる仕組みが間で共存を可能にする、より上位の仕組みが必要です。文明が共存する仕組みが要ります。近代には、西洋の仕組みを人類全ての仕組みにすればいい、という単純な思い込みがありました。そうはいかないことは今日でははっきりしています。といって、イスラーム文明の仕組みで「平和を！」と言っても、今の世界では西洋型の方が優勢ですから、その仕組みで平和を達成することはできません。そこで、高次の文明共存の仕組みが必要だと思いますが、人類はまだそこに達していないのだろうと思います。世界の中に複数の仕組みがあるために摩擦が起きているところはいくつも見られますので、どうやってその上にいけるのか、悩ましいところだと思います。

アラブ研究、イスラーム研究をもう38年も続けておりますが、つき合うようになった経緯など、個人的な体験を少しお話ししたいと思います。

私にとっての入口は、アラビア語でした。このように右から左へ書く文字に惹かれて、大学に進学する時に、東京外国語大学のアラビア語学科を選びました。日本の外の世界に非常に興味がありましたので、外国語を勉強したかったのですが、とにかく珍しい言語がいいと思ったわけです。日本語は上から下へ書きますし、英語などのローマ字の言語は左から右に書きます。下から上へ書く言語は残念ながらありませんので、残っているのは右から左へ書く言語ではないか、それを学べば世界がわかるのではないかと期待して、

アラビア語を勉強しようと思い立ったわけです。アラビア語の世界は非常に奥が深いものですから、すっかり入れ込むことになって、未だに続けております。

右から左へ書くアルファベットは、非常に不思議な感じがしますが、実はアラビア語のアルファベットとローマ字は、文字としては兄弟です。ふつう言われているところでは、古代エジプトのヒエログリフ、「神聖文字」と呼ばれる象形文字ですが、これがだんだん簡略化されて今のアルファベットの祖先になりました。ですから、音も似ています。「アルファベット」という言葉は、ギリシア語のアルファベットの冒頭の「アルファ・ベータ」に由来しますが、アラビア語では冒頭は「アリフ・バー」です。「アルファ」と「アリフ」、「ベータ」と「バー」、そっくりです。兄弟だというのがわかりいただけますでしょうか。

象形文字は絵文字ですから、漢字で山の形を「山」にしたのと同じような仕組みでできています。絵文字は、一文字一文字が独立しています。古代エジプトでは縦に並べることもできました。それが簡略化されてアルファベットになった時、右から並べるか、左から並べるか、どちらでも可能だったわけです。

今の私たちは、ローマ字で書く英語や、西欧語のことはずいぶん知っていて、ヨーロッパやアメリカのことはくわしく知っています。情報もあふれています。それに対して、アラビア文字は見慣れない、それを右から左へ書いている世界はよくわからない気がします。アラブとかイスラームというと、非常に遠い感じがします。しかし、「アルファ・ベータ」と「アリフ・バー」が兄弟ないしは親戚だとしますと、ローマ字とアラビア文字の違いは、単に情報の距離の差、あるいは情報伝達の時間差にすぎない面があります。思うほど、本当は遠くないかもしれないということです。

とはいえ、文字の書き方が、右から左、左から右では、全く逆ですから、そのことに象徴されるように、根本的なものの考え方が違うという面もあります。西洋がわかるから、イスラーム圏もわかるというように、単純にはい

かない面もあります。

キリスト教圏とイスラーム世界、あるいは西洋とイスラームの対立、文明の衝突という議論があります。衝突ではなく、対話が大事だという反論もありますが、衝突にしても対話にしても、西洋とイスラーム圏の関係が国際社会の中で大きな問題だという意識は、皆さんもお持ちだと思います。その場合に、両者の関係性が、この文字の違いに象徴されているような気がします。一方では、同根です。もとのところまでたどれば同じルーツを持っているという側面があります。しかし、向きが逆になっているという側面もあります。その両方の面を、日本から見てどう理解していくのかが、大きなポイントではないかと思います。

私は今、京都大学のアジア・アフリカ地域研究研究科という大学院で教えております。分野としては「イスラーム世界論」と呼んでおります。「イスラーム世界」の統一性と多様性はどのようなものかという議論しながら、その実態を研究しております。私がアラビア語を学び始めてまもなく、1973年に第四次中東戦争があり、第一次オイル・ショックがおきました。いわゆる石油危機になって、日本では「狂乱物価」という言葉も生まれました。戦後の「奇跡の復興」から、1960～70年代の日本は経済の高度成長を続けていましたが、オイル・ショックでその成長が止まるほどの影響がありました。これをきっかけに、日本でもアラブ諸国についての認識が生まれました。日本経済のエネルギーは中東から来ているということが実感されたわけです。

そのしばらく後に、私はエジプトに留学いたしました。エジプトに8年滞在して、帰国してから『エジプト・文明への旅』という本を書きました。ふつうでしたら「エジプト文明への旅」と言うかもしれませんが、「エジプトという文明への旅」という意味です。そのエジプトには現代も入っています。日本では「エジプト文明」は古代を指します。ピラミッドとスフィンクスのイメージです。ピラミッドはたいしたものでありまして、私も行くたびピラミッドを見ると、そのすごさに感銘しますが、エジプト文明というと古代のイメージになることに反対して、この本の題名を付けました。古代だけでは

なく、エジプトはずっと文明の国であると言いたかったのです。古代文明もあったし、キリスト教時代の文明もありました。イスラーム文明の中心地もありましたし、今だって文明の国である、そういう目でエジプトを見ていただきたいという気持ちで書きました。

では、文明とは何か。それをエジプトで、いろいろと考えさせられました。ピラミッドのような世界遺産を見ると、誰でも文明に思いをいたすだろうと思います。確かに、古代において百メートル以上も高い石の建造物を建てる、それが何千年もびくともせずにそこにあるような技術力の高さを見ると、高度な文明を感じさせられます。しかし、テクノロジーだけが文明なのか、というのが私の考えたことです。現代文明はテクノロジー的にはたいへん高度になっていますが、それだけでいいのかという疑問を持ちました。人間が幸せになるとか世界が仲良くなるというような観点から見ると、文明が高度になったと言えるかどうか、疑問が湧きます。

最初に出会ったイスラーム国がエジプトだったのは、幸運だったと後で思うようになりました。エジプト社会を見て、そこに暮らすイスラーム教徒(ムスリム)の生活を見て、そこからイスラームとはこういうものかという理解をしたわけですが、私にとってエジプトが最初のイスラームの例だったことは、きちんとした視座を作る上で大きな意義がありました。その後、ほかにいろいろなイスラーム国に行く機会を持ちました。いわゆるイスラーム圏は60近くの国がありますが、私が訪れたのはそのうちの半分くらいです。イスラーム圏以外で、イスラームが重要なマイノリティーとして存在する国も40~50あると思います。こちらの方も10くらい訪れることができました。いろいろな国を訪れると、イスラームといっても、非常に多様であることがわかります。その体験を繰り返していると、最初の自分が理解したのはエジプト風のイスラーム社会だったということがわかってきます。そして、そこからスタートしてイスラーム世界の理解を広めたことは、私にとっては非常にプラスでした。自分で選んで行ったわけではありませんで、恩師の勧めだったのですが、結果として幸運だったと思います。

エジプトのどこがよいかと申しますが、エジプトの皆さんはとても開放的で、人好きなのです。留学生にとっては、何を学ぶにしても、開放的な社会は楽です。たとえば道を歩いている人に、ちょっと声をかけます。こちらは外国人なわけですが、誰でも気兼ねなく相手をしてくれます。私が「喫茶店学習法」と名づけた勉強方法があるのですが、どこでもいいので喫茶店に行つて、そこに座っている人と会話をして、言葉の練習をします。喫茶店にいろいろな人が座っているので、適当に「隣に座っていい？」と聞くと「どうぞ」と言ってくれるので、座っておしゃべりをします。日本では、これはできませんね。喫茶店の中に一人で座っている人がいても、外国人が「隣に座って、話をしてもいいですか？」と聞いて、気楽に「どうぞ」と言ってくれるとは思えません。「だれですか?!」と、驚かれるでしょうね。

そうやって初めて会った人でも、気楽に相手をしてくれますし、すぐにお茶をおごってくれます。喫茶店にいたら、いつのまにか、誰かが代金をはらってくれていたという体験も何度もしました。ちょっと知り合うと、お茶を飲もう、とおごってくれる。食事に誘ってくれる。呼ばれて食べに行くと、歓待してくれる。ホスピタリティーが半端ではありません。

そうこうしているうちに、ホスピタリティーがイスラームの非常に中心的なテーマの一つだとわかってきました。エジプトだけではなく、いろいろなイスラーム国へ行くと、遠くから来た人をもてなすホスピタリティーの原則があることがわかります。イスラーム圏では、たとえば田舎にでかけて日が暮れて、町のホテルまで戻れない時、どうするかというと、あたりの家のドアをたたいて、泊めてもらいなさい、と言われます。ドンドンと扉をたたいて、「旅の者です。お助けください」と言う。すると、実際に、泊めてくれます。

エジプトの皆さんは開放的と申し上げましたが、ほかの国でも、性格がもっとシャイだとしても、ホスピタリティーはあります。表現方法は、国によって異なっています。

なぜ、イスラーム圏にはホスピタリティーが行き渡っているのだろうと、

不思議に思っていました。ある日、イスラーム法学の本を読んでいたら、答えに出会いました。イスラーム法は、宗教的な倫理や戒律だけではなく、日本で言う法律も合わさったものなので、いわゆる「法」とは違うのですが、その話はまた後でいたします。とにかく、イスラームでは何にでもイスラーム法の指針があります。それで、法学書を私はいろいろ読むのですが、ある日「客の権利」という項目に出会いました。それは3日3晩である、と書いてあります。客には3日3晩泊めてもらって、ごはんを食べさせてもらう権利がある、と。そこで、「客」とはだれかということですが、エジプトでよく「ごはんを食べていって」と誘われるので、「見知らぬ人になぜ？」と聞くと、「あなたは見知らぬ人だから」と言われます。つまり、よそ者だからお客さんなのだと。当たり前ですが、身内は「客」になりません。よそ者だからこそ「客」であり、客の権利があるのだと、こういう議論なのです。この考え方は、サラームのあいさつと同じで、いろいろな民族がいて、いろいろな言語がある、文化も違う、そのときにどうやってつき合うのかという仕組みを作るものだと思います。

つまり、ホスピタリティーの原理とは、文明的な知恵だと言えます。文明の十字路で、多民族が交わる場所だからこそ生まれる知恵というものがあるのだと思います。それで、現代の話題をしていると、イスラーム圏のあたりでたくさん摩擦が起こっているじゃないですか、それはなぜですかと訊かれることが多いのですが、実はイスラームの歴史をずっと見てみると、平和の時期のほうが圧倒的に長いのです。それは異民族共存の原理がわりとよく効いていたからだろうと思います。それが何で効かなくなったかと言えば、先ほど申し上げたように、19世紀以降、西洋型のシステムが世界に広まりました。西洋型のシステムは、物質文明の力を上げていくのは得意ですが、共存の方はあまり優れていないように思います。イスラーム型は共存が優れているとしても、近現代では西洋型とのシステムの摩擦が生じて、共存の原理もうまく機能していないのだと思います。

そうすると、私たちは今、文明が非常に発展した段階にいます。科学はす

ばらしいものですし、テクノロジーはたいへんな水準に達しています。文明というと、すぐそちらが目につきます。しかし、文明が技術だとしても、科学的な技術や生活を便利にする技術だけが技術ではなく、人間社会を運営する技術というのものもあるだろうと思います。行政や経営というのもの、そのような技術の種類です。ところが、世界中にいろいろな民族がいて、いろいろな国がある、その間で仲よくする技術は進んだかと問えば、私は進んでいないと思います。20世紀は戦争の世紀でした。科学やテクノロジーは、兵器の破壊力を非常に高めました。しかし、それに見合うように共存の技術が進んだかといえば、残念ながら必ずしもそうは言えません。

ところが、たとえばエジプトでもよろしいのですが、経済水準では日本とは比べものにならない、技術力も遅れていると思える国が、人間生活の技術ということからいえば、とても進んだ面というか、成熟した面を持っているのです。ですから、近代型の科学技術偏重の文明から解き放されて、文明というのを、モノだけではなく心も豊かな生活をするための技術が大事だと考えると、もっと幅の広い考え方ができると思います。ある国が途上国であるという、日本がいかに技術移転を助けるかというような話になりますが、一歩下がって冷静に見るならば、そのような文明圏から学ぶものがたくさんあるのではないかと。そんなことをずっと考えながらエジプトで過ごしていましたし、今でも、そういうことを考えております。

イスラーム世界の全体像を見てみたいと思います。現在、世界人口の5分の1を超えたところです。数字でいうと23%ほどです。これは昨年、アメリカの非営利の調査機関が出した数字ですが、その時点で総計が15億7千万人でした。それから1年ほどたっていますので、10億人が年率3%で増えると3年で1億人というような数ですから、今日では16億人は超えただろうと思います。今回の数字は、信憑性が高いと思います。実はイスラーム人口は推計しかありません。推計の方法は大きな問題で、ご存じのように、世界の国の中には人口自体が推計しかない国がいくつもあります。また、宗教別の人口を数えない国がたくさんあります。どの宗教が多いかを論じると、

国内で政治問題化する場合があるわけです。そういうこともあって、イスラーム人口の推計は非常にむずかしい。私たちが計算する時も、各国の人口にそこでの宗教比率を掛けて計算しますが、場合によってはその両方が推計ということもあります。国別の推計値が出ると、その総和を世界人口の中でのイスラーム人口と考えるわけです。今回は、それを何十人もの各地域の人口の専門家を動員して計算したというので、私はかなり精密な数字が出たと判断しています。その推計で、23%であるということで、今後さらに増えますので、世界人口の5分の1から4分の1に移っていくあたりに現在あることになります。

それで、独立国を数えると、イスラーム諸国会議機構(O I C)のメンバーが56カ国+1地域です。1地域とはパレスチナです。パレスチナにはまだ独立国家がなく、国連でもオブザーバーですので、1地域と数えています。ただし、イスラーム諸国会議機構の中ではパレスチナは1つの国として扱われています。非イスラーム圏が何と言おうと、国際社会ではまだ十分認められていないにしても、自分たちの仲間では一人前にみなそうということだと思います。それに従えば57です。その国が全部、イスラーム教徒(ムスリム)が多い国かといえば、そうではありません。加盟国の中には、ムスリムが国民全体から見れば少数の国もあります。それでも、その国の政府が、我が国にはイスラーム人口があるから、私たちもイスラーム諸国会議機構に入って国民の中のムスリムを代表しておきたいと希望すれば、加盟できます。イスラーム諸国会議機構に入るからといって、ほかの宗教を排除することには全くなりません。イスラーム諸国会議機構に入っているからと言ってムスリムが多数派の国とは限りませんが、ほかに基準がありませんので、普通は、このイスラーム諸国会議機構に入っている国をイスラーム国とみなします。さらに、この加盟国以外で、国民の中にムスリムがそれなりにいる国も数えると、全部で100はあります。ですから、世界の全部の国の半分より少し多いぐらいのところにイスラームが広がっていると言えます。

日本から見ていくと、ブルネイ、マレーシアが一番近い国です。南フィリ

ピンにもムスリムが集中しています。そこから西に向かって、東南アジアから、南アジア、中央アジア、西アジア、北アフリカへ進むと、モロッコ、モーリタニアのあたりで大西洋に出ます。かつては、イスラーム圏は太平洋から大西洋まで、と言われていました。現在では、イスラーム諸国会議機構の加盟国はさらに大西洋を越えて、南米のスリナムとガイアナもそうです。このあたりは移民を通じて広がったわけですが、移民という点では、今、西ヨーロッパ、北アメリカでもムスリムがずいぶん増えています。

そうしますと、イスラーム圏とはどこかと言うと、先ほど皆さんに紹介した「アッサラーム・アライクム」のあいさつが通じるところが、イスラーム圏と言ってもいいだろうと思います。元来はアラビア語ですが、それがイスラームのあいさつとして広がっているところがイスラーム圏です。

ところが、そう言う、そのような地域はパリにもあるわけです。そこではアルジェリア系、モロッコ系の人びとがたくさん住んでいて、店の看板にもアラビア文字が書いてある。ロンドンにもそういうところがあります。その通りを歩いていると、新聞スタンドで売っている新聞がどれもアラビア語という通りがあります。昔ですと、ロンドンでアラブ現地の新聞を買おうと思うと、そういう通りに行っていました。最近では、ロンドンの普通の日抜き通りでもアラビア語の新聞を売っていますから、随分変わってきた感じがします。アメリカでも、ニューヨークやワシントンなどで、タクシの運転手さんにムスリムが多い。アメリカは移民の国ですから、後から来た人たちがとりあえず運転免許があればできる仕事に就くということかと思いますが、そうすると、金曜日のお昼の礼拝の時間になると通りを流しているタクシーが減ってしまうようなことになっています。こうしてみると、イスラーム圏は人に着目すると非常に融通無碍に広がっていると言えると思います。

人口で考えますと、今、一番多い国はインドネシアです。インドネシアは人口規模で言えば、中国、インドに続くアジアの大国ですから、大きいのも当然かもしれません。その次は、南アジアの3カ国、つまりパキスタン、バングラデシュ、インドです。インド自体はイスラームの国ではありません。

ムスリムは15%ぐらいとされています。マイノリティーといっても、総人口の15%でも、絶対数は日本の人口よりも多いですから、これがマイノリティーだろうかという気もしますが、国の中でマイノリティーか、マジョリティーかと言えば、マイノリティーです。続いて、ナイジェリア。私たちはイスラームというと中東のイメージを持っています。イスラームは、確かに中東のアラビア半島から始まりました。しかし、今日の人口でいうと、第6番目以降にようやく中東の国が登場して、エジプト、トルコ、イランとなります。今世紀の半ば、2050年の予想では、パキスタンが世界最大のイスラーム国になります。インドネシアは、2番目です。その後、ナイジェリア、バングラデシュと続くのですが、その頃の世界を人口で見ると、インドが1番、中国が2番、アメリカが3番で、パキスタンが4番、というように予想されています。

世界地図の中でイスラーム世界を見ると、アラビア半島から始まりましたから、イスラームはアラビア半島から周りにずっと広がって、東西に伝播しました。西の果ての方は大西洋を越えて南米まで行って、東のほうはようやく日本まで達し始めました。ちなみに日本になぜこれまでイスラームが来なかったかという、イスラームが東進してフィリピン南部まで達した頃に、フィリピンがスペインに支配されるようになりました。そのため、マニラから日本にはイスラームではなくて、キリスト教が来たわけです。

このように世界の東西にイスラームが広がっています。これだけ多様な諸地域が「イスラーム世界」としてイスラームの名のもとにあります。その土台のところに、イスラーム法があります。イスラーム世界とは何かという時、私たちはよく「統一性と多様性」と言います。一つには、イスラームとしての共通性がある。それと同時に、多様な地域があって、文化や生活習慣も非常に多様だと言います。イスラームという言葉ではかたづけられない多様性があります。しかし、統一性と多様性を比べると、私は多様性は珍しくないだろうと思います。これだけたくさんの国があれば、多様なのは当たり前のことです。たとえば、「ヨーロッパ、ヨーロッパと言いますが、言語

はたくさんあり、多様なのです」とは言いません。多様なのは当たり前のことですし、そのことを誰でも知っていますから。その意味では、イスラーム世界もこれだけ東西に広がっていれば、いろいろな文化があり、いろいろな言語があるのは不思議でも何でもないので、むしろ問題は、これだけ多様であるにもかかわらず、なぜイスラームとして一つにくるまれているのかということです。これが実は謎の部分なのではないか、と私は思います。多様性については具体的に調べていると、こちらの国はこうで、あちらの地域はああで、というのが非常に面白いのですが、多様で違っているという事実そのものは別に謎でも何でもないと思います。

そうしますと、多様でいろいろ違っているのが当たり前の広大な地域、膨大な人口がイスラームによってまとまっている面を持っているのは、なぜか。それを考える時に、イスラーム法のことを考える必要が生じます。イスラーム法というと、戒律というイメージだと思います。皆さまでも、イスラームの戒律は厳しいという印象が強いと思います。私は厳しい面と、そうではない面がある、という意見です。

戒律の厳しさについて、わかりやすい例はラマダーン(断食月)でしょう。イスラーム暦の9月は「ラマダーン」という名前の月になっています。イスラーム暦は純粹な太陰暦で、月の出を見て毎月が始まります。月の動きだけで作られていて、太陽暦に合わせて日数を調整しませんので、1年間で354日しかありません。ということは、太陽暦より11日間短いので、季節が次第にずれていきます。ラマダーン月は、今年の場合、8月11日から9月10日くらいです。来年になると、また11日ずれますので、太陽暦の8月とほぼ重なります。太陰暦の月は1ヶ月が29日または30日です。月は地球の回りをおおよそ29.5日で回っていますので、29日か30日になります。ラマダーン月には、この日数の間、毎日断食をしなければいけません。断食は、日が昇る前の1時間半ぐらい前から日が昇って、日中ずっと飲食してはいけないという戒律です。水の1滴もだめです。そのかわり、日が沈んだら食べます。1日ぐらいならたいしたことはないかもしれませんが、これが毎日、1カ月

間続きます。これは、戒律として厳しいでしょう。ところが、イスラーム圏へ行きますと、どこでも、ラマダーン月が近づいてくると、期待感というのでしょうか、楽しみにしている感じが人びとの間で盛り上がってくるのです。日本の感覚から見ると、厳しい戒律の月が来るということですが、「またラマダーンが回ってくるよ、嬉しい!」と、町中が盛り上がっていくわけです。そして、ラマダーン月の新月の観測を楽しみに待っている。そうしますと、厳しい戒律がなぜ楽しいのか、という疑問が湧いてきます。

今申し上げたように、朝から飲食を摂らないのですが、季節によって1日の日中の長さは変わりますから、たとえば仮に4時半から食べてはいけないとしましょう。夕方6時ぐらいに日が沈むとすると、13時間以上食べられないことになります。これは厳しいです。では、日が沈んだらどうなるか。誰か「私は1日断食したけれども、信仰心が強いので、もう2時間頑張ります」という人がいたとします。それは、イスラーム的には正しくありません。日が沈んだら、すぐに断食を破りなさい、というのが戒律です。勝手に長くしてはいけない。そして、断食を破ったら、みんなで仲よく、ご飯をたべなさい、おいしく食べなさい、という戒律があります。食べるものがない人には分けてあげなさい、というのも戒律の一部です。イスラーム圏のラマダーンは、特に都市部だと、夜通し皆で楽しんでいます。お酒は飲みませんが、みんなで仲よく、ご飯を食べて、お茶を飲んで、おしゃべりして、幸せに暮らします。

このごろは日本でもイスラーム圏に旅行する人が増えているので、旅行会社から「ラマダーン警報」のようなものが出ます。今年は何月何日からラマダーンになりますよ、というお知らせです。その間に旅行に行くと、昼間はレストランが閉まっているので不便ですから、という警告みたいなところがあります。実際、お客さんが来ないわけですから、レストランは閉まっています。この季節は夜の営業が主になります。確かに観光客にとって昼間は不便ですが、私はラマダーン月はおもしろいので訪問したらいいと思います。昼間も旅行者の皆さんは食べてもいいといってもホテルのレストランくらい

しか開いていないので、少し不便ですが、夜が楽しい。6時に日が沈むとしましょう。5時半ぐらいに町に出ると、エジプトなどでは、レストランはお客さんで満杯です。全員が席に座っていて、予約していないと入れないくらいです。ところが、だれも食べていません。テーブルに食べ物がずらっと並べてあるけれども、日が沈むまではじっと待っています。私たちが見ると、とても不思議な光景です。

それだけではありません。歩道にもテーブルが出してあります。これは「慈悲者(神)の食卓」と呼ばれるのですが、これはだれでも食べていい食卓です。貧しい人や旅人のための慈善の食卓です。それが、ずらっと並んでいる。日本から旅行に行った方も、そのようなところに出会ったら、是非座ってご馳走になったら面白い体験をするのではないのでしょうか。歩いていると、「どうぞ」と誘ってくれます。誰が座ってもいい食卓なので。ただし、そこも、日が沈むまでは待っていないといけません。

日が沈むと、皆が「いただきます」と食べ始めます。イスラーム圏ですから、「いただきます」は「アッラーの御名によって」と言います。日が沈んだときの一瞬を想像すると、エジプトはすごいと思います。なぜかという、エジプトは東西に幅がないので、時差がありません。ナイル川がほぼ一直線にずっと南から流れてきて、カイロの北でデルタに展開して、やがて地中海に注ぐ。そこにだけ人が住んでいて、両側は東西に砂漠が広がっています。日本のように東西に長いと東京で日が沈んでも、関西ではまだ日があります。エジプトでは、全国ほぼ一斉に日が沈みます。

今のエジプトの人口は8千万人くらいです。子どもは断食しなくてもいいのですが、食事は両親といっしょに食べます。キリスト教徒も1割近くいますので、その方たちは除くとしても、7千万人がいっしょに日没に食事を取ります。7千万人がいっせいに「いただきまーす」という姿を想像すると、迫力があると思いませんか。

夜は、とっても楽しい。互いに訪問しあって、ご飯を食べたり、お茶を飲んだり。これは、イスラーム圏はどこでもそうです。地方によっては、村ご

と全員でご飯を食べる習慣があります。30日間ありますから、村を30分の1ずつに分けて、担当の家に村人が全員集まって食べるというのです。自分の家の時が一日あって、あとはよその家に行って毎日食べさせてもらう。いっしょにご飯を食べると仲良くなりますから、村がまさに共同体になるのでしょう。そういう習慣のところもあります。

そのような側面を見ると、非常に楽しい生活だと思いますが、これも戒律です。そうすると、昼は食べてはいけない、という戒律は厳しいです。その一方で、夜は、幸せに仲よく食べなさい。貧しい人のために食を饗しなさいという戒律もありますから、貧しい人もご飯が食べられます。この戒律が厳しいかということ、そうではないと皆さんも思うでしょう。このあたりを理解しないと、なぜ厳しい戒律の月が近づいて、町中の人に期待感が出てくるかわかりません。日本でも「もういくつ寝るとお正月」という歌がありますが、あの期待感のようなものです。夜の楽しさを見ると、お正月が30日間あるような感じもします。

「戒律が厳しい」という場合、2つの意味がありうると思います。1つは、文字どおり、戒律の大変さです。断食は大変でしょうし、1日5回のお祈りもそれなりに大変でしょう。ちなみに、日本でわりと多い誤解は、昼間に5回礼拝があると思っている方がいて「1日5回も礼拝していたら、生産性が上がらないでしょう」という疑問を聞きますが、5回の中には早朝、夜、日没後がありますので、会社に行っている間に当たるのは昼間の2回分です。普通の会社や工場でも休憩時間がありますから、それをもって生産性に影響が出るかと言えば、そうでもないだろうと思います。ただ、毎日5回ずつが厳しいといえは厳しい面はあるだろうと思います。そのような意味での、戒律を守るのは大変である、という厳しさ。

もう一つの厳しさは、内容が何であれ、戒律はまげられない、という厳しさです。アラビア半島は暑いので、お祈りは3回に減らしましたとか、今年は猛暑なので、ラマダーンは2週間に縮めましたとか、できません。ラマダーンが1カ月であるといったらイスラーム世界のどこでも1カ月、礼拝が1日

5回といったら例外なく5回である、という厳しさがありません。貧しい人にも食べさせなさいといったら、それは守りなさい、と。どこかの地域に行くと、そこでは貧しい人を放置しています、というわけにはいきません。どこでも同じ規定が適用される厳しさがありません。それは、内容が楽なことでも、厳しいことでも、同じです。同じルールをイスラーム世界のどこでも適用する、という厳しさです。

イスラーム法には、この2つの厳しさがありません。外から見ると大変だろうと思うわけですが、厳しいからいいという面もあります。これを、サッカーのルールにたとえることもできます。「悪いけど、日本では手を使わせてもらいます」というのでは、サッカーになりません。サッカーは手を使わずにボールを動かす競技という国際ルールがなければ、国際的な試合はできません。イスラーム圏は、どこでもイスラームのルールは同じです、ということで、いわば同じゲームができます。それで、一体感が作られています。そのような仕組みによって、同じ考え方が成立して、共通性が形成される世界なのだと思います。

イスラームの共通の性質は、西暦7世紀にイスラームがアラビア半島で始まって間もなく、非常に短期間で東は中央アジアから西は北アフリカ、イベリア半島(今日のスペイン)に及ぶ大帝国ができ、8世紀には国際的な貿易ネットワークも形成されましたから、イスラームがルールとして広域に行き渡りました。その後もどんどん広がっていきました。最初は征服による版図でしたが、東南アジアや東アフリカなどで広がったのは商業ネットワークを通じてでした。商人が出かけて、イスラームをどんどん広めたのです。それはたぶん、イスラームが当時のグローバル・スタンダードを作ったためでしょう。

イスラームは宗教としては珍しく商売を奨励しますので、国際的な交易ネットワークを確立し、その中で商人がたくさん活躍するようになりました。それまでの商業でいろいろな文化、文明があると、商取引が必ずしもうまくいかなかったところが、イスラームが登場して商取引のやり方、契約方法な

を整備し、さらに民事紛争が起こったときの処理方法も決めてあったわけですから、それが国際標準となったのだらうと思います。利便性が評価されて、イスラームそのものも広まりました。その意味では、当時の国際社会の基礎を成す共通のルールを提供し、それゆえ多民族・多人種・多言語のところにイスラームが広がっていく。そういうところでは、私が申し上げた2番目の厳しさ、内容は厳しくても易しくてもいいのですが、同じルールを貫徹するという性質がプラスに働いたことは間違いありません。

今のこの瞬間の国際社会は、グローバル化時代、グローバリゼーションが強調されますが、一言で言えば弱肉強食です。それに対してイスラームの主張というのは、「敗者復活」あるいは「弱者救済」という原理が常にあって、現在の既存の国際社会に対して非常に強い申し立てになっています。今、イスラームは世界宗教の中で一番速い速度で増えていると言われています。その理由には人口増もありますし、イスラーム自体が広がっている面もあります。その背景には、弱肉強食に対してのアンチテーゼとしての側面があるのではないかと思います。

きょう、私は、日本から見るとイスラームはまだ遠いということを前提にお話していますが、私たちの周りには意外にアラビア起源の言葉がたくさんあります。遠い気がする一つの理由は、日本での思い込みです。日本は西洋からたくさんのかたちを学びましたが、西洋そのものはその少し前はイスラーム圏から科学や技術、知識を必死で吸収していたわけです。それを身につけた西洋が世界に進出して、日本にも来ました。そのため、日本では、イスラーム原産のものでも、西洋の文物と思い込むことがおこりました。

たとえば砂糖菓子、日本にコンペイトウとして到来します。ポルトガル経由で来て、当時の日本人が「この不思議な甘味は何?!」と驚きました。しかし、その一つ前に戻ると、イスラーム圏から砂糖が西洋に伝わり、西洋の人びとが夢中になったものです。その意味ではイスラーム圏のものなのですが、日本に到着した時には西洋経由なので、何となく西洋の気がしています。そういうものがたくさんあります。

アラビア語は聖典クルアーン(コーラン)の言葉ですから、イスラーム世界の共通語です。さきほど、サラームのあいさつを紹介しましたが、アラビア語起源の単語は西欧語にかなり入っています。今しがた申し上げた砂糖、英語ではシュガーですが、アラビア語のスッカルです。それから、カフェ、コーヒー、これはアラビア語のカフワから来ました。植物としてのコーヒーはアフリカのエチオピアの原産とされていますが、エチオピアでは飲料ではありません。それが紅海をわたって、向かい側のアラビア半島のイエメンに行き、飲み物になりました。それがカイロに行ってカフェで飲まれるようになり、さらにイスタンブールでカフェ文化が広まります。イスタンブールは当時のオスマン帝国の首都ですから、ここでヨーロッパの大使や商人がコーヒーとカフェに出会って、これはすごいとヨーロッパに持ち帰ったのです。カフェというと、何となく私たちはパリのカフェが本場というイメージでいます。パリのカフェは歩道に張り出していて、いかにもしゃれている感じですが、中東に行くと同じようなカフェがあります。私たちは「あ、ここにもある」と思いますが、こちらが本家で、パリのほうが後でまねたものです。そのカフェも、アラビア語起源です。

それからレモン、バナナ、オレンジ。オレンジやライムなどの柑橘類の名前は、だいたいアラビア語起源です。柑橘類はもともと暖かい地域の作物であったのを、イスラーム圏で寒冷地にも適応させて、それが名称といっしょにヨーロッパに入りました。ライス(米)も、ロズ(ルズ)というアラビア語から来ています。日本では「ライス」という言葉はヨーロッパから入りましたが、作物そのものはもともと日本にあります。ヨーロッパの場合、米もその名称もイスラーム圏から来ました。米はもともと熱帯で栽培していましたが、イスラーム圏での農業改革で温帯でも栽培できるようになって、ヨーロッパに輸出されました。あと、シロップ、シャーベット、アルコールなどもアラビア語起源です。「アル～」というのはアラビア語の定冠詞なので、それが付いたままスペイン語に入って、他の西欧語に伝わった言葉もたくさんあります。食べ物や作物をいろいろ挙げましたが、その背景には、イスラーム

ム圏での農業技術革命がありました。

こうしてみると、皆さん、コーヒー、シュガー、レモンなど、毎日口にしている言葉です。実際にレモンティーやコーヒーを飲んでいます。「ティー」は、さすがにイスラーム圏経由ではありません。お茶そのものはインドと中国の間あたりが起源のようですが、ヨーロッパのお茶文化は日本から伝わったことが最近定説になってきているようです。いずれにしても、シュガーやレモンのように毎日口にしている言葉がアラビア語起源と知ると、意外に近い気もしてきます。

そして数学。「ゼロ」はアラビア語のスフルが起源です。実は代数学は、イスラーム圏で発達しました。私たちは数学というと古代ギリシアのイメージがありますが、ギリシアで大きく発展したのは幾何学です。最近ではインドがIT技術で発展していて、「さすがにゼロを発明した国だ」と言われます。ゼロそのものは、ないものに数字を当てたという天才的発明ですが、ゼロだけでは計算できません。桁の概念が必要です。桁は古代バビロニアで発明されたといえます。イスラーム圏では、インドからゼロを輸入して、バビロニアの桁を合わせて数学を作ったわけです。そのため、アラビア語のスフルが「ゼロ」になりました。数字そのものを「アラビア数字」と言います。私たちは毎日使っていますが、これもイスラーム圏から来たわけです。アルジェブラ(代数学)もアラビア語のアル＝ジャブルが起源です。「アルゴリズム」は、問題解決の手法、演算規則などの意味で使われますが、これも元はアラビア語から来た言葉です。

次に、天文学。イスラーム時代には、イスラーム天文学が大きく発展しました。私たちは空の星を見ると、星の名前はギリシア語、ラテン語が多いと思いますが、肉眼で見える星の3分の2はアラビア語起源の名前だと言われています。よく光っている大きな星はギリシア語、ラテン語が多いのです。つまり肉眼でもよく見える星はわりと早くに名前がつけました。さらにイスラーム時代に、天文学が大きく発達し、たくさんの星に名前を付けました。ガリレオ以前ですから、望遠鏡がありません。肉眼で観測するのですが、

星が目に見えるから同定できるわけではなく、どの星がどれか決めるのは、星の動きを見て座標を決めなければいけません。天文台をつくって観測を続けて、星に名前をつけていく。それができると、今度は星を見ただけで、今どのぐらいの時刻とか方角とかがわかるのです。これはイスラームで1日5回の礼拝をすることと関係があります。イスラームでは、アラビア半島にあるマッカ(メッカ)のカアバ聖殿に向かって礼拝をすることになっていますので、世界中どこにいても、方位が正確にわからないといけません。時刻もわからないといけません。今でしたら、誰でも時計を持っていますが、前近代では太陽や星を見て、時間や方角を知りました。それで天文学が発達したのですが、そのため、私たちがギリシア語かと思っている名称が意外とアラビア語起源なのです。

皆さんも知っているような星をあげます。アルタイルはいわゆる彦星ですが、「アッターイル」というアラビア語の「飛ぶ鳥」の「飛ぶ」の語が起源です。それから、琴座のヴェガは、和名は彦星と対の織姫です。「ヴェガ」と訛っているのでギリシア語かラテン語のようですが、これも「ワーキウ」というアラビア語から来ています。ヴェガは、さきに説明したことから言えば珍しい例です。この星は北天で一番輝いている星ですから、目に見えやすい星はギリシア語・ラテン語だという点から言えば、こんなに明るい星がアラビア語起源の名称が伝わっているのは珍しいのです。それから白鳥座のデネブ(意味は尾)、鳩座のファクト(鳩)、さそり座のアクラブ(さそり)、双子座のワサト(中央)、ペガサス座のマルカブ(乗り物)、おおぐま座のドゥベ(おおぐま)などがあります。最後は、北斗七星のアルカイドです。杓のしっぽにあたるところで、方向がよくわかるので「導く者」を意味します。この話をする、アルカイドは過激派の「アルカイダ」と関係がありますかと、皆さんがお聞きになりますが、関係ありません。片仮名にすると似て見えますが、アラビア語では全く別な文字です。

こういうふうに見ていくと、私たちが親しんで使っている言葉で、意外にたくさんアラビア語起源の単語があります。だから、イスラーム圏は遠いよ

うですが、実は知らないだけで意外に近いという面もあると思います。もう一つ、日本ではイスラームがよくわからないというイメージがありますが、私は日本のイスラーム理解はどんどん進んでいるという意見です。私が勉強を始めたころは、イスラームは回教と呼ばれていました。「回教／回回教」「マホメット」「アラーの神」「コーラン」「メッカ」「メジナ」などと言っていました。これはみな、当人たちの固有名詞です。イスラームは宗教の名前、ムハンマドは開祖の名前、アッラーは信仰対象の神、クルアーンは聖典の名前、そして二大聖地のマッカ、マディーナです。人間にたとえると、これは本人の名前にあたります。ほかのものの名称はさておき、本人の名前を間違えていたら、きちんとしたつき合いはできません。コジマさんという人に「コバタさん」と呼んでいたら、怒るでしょう。いくら訂正しても、「はい、コバタさん」と間違えていたら、仲よくできません。人の名前を覚えてきちんと呼ぶのは、人間関係の基本ですから、一番大事な名称を間違えてはいけません。

しかし、その点を見ると、30年の間に全く変わりました。今では、イスラーム、ムハンマド、アッラーは日本語でもきちんとしていますし、クルアーン、マッカ、マディーナもおおむねきちんと表記されるようになってきました。その点を見ると、日本ではイスラームの誤解が多いというのは当たっていないと思います。欧米では、「イスラームは非常に誤解されている」ということをムスリムがとても強く言います。日本では違います。実際問題として、十分知られていないにしても、誤解をされるほどの情報ありません。しかし、情報が徐々に増えてくる中で、一番大事な固有名詞が30年の間にきちんと直ってきていることは、非常に大きな進歩だろうと思います。ですから、日本ではイスラームは遠いし、誤解も多いという認識があるとすれば、少し一面的ではないかと思います。日本は世界文明を理解しようとする力が働く文化ですから、イスラーム文明についてもきちんと理解する方向に進んでいると評価できます。もっと進んだ方がいいというのであれば、それはそうですが、誤解が多いと言う必要はないだろうと思っています。

あと、「イスラーム」と伸ばし音を入れるのと「イスラム」と短く言うのと、

どちらがよいのか、イスラーム教というか、「教」をつけずにイスラームというのか、という点があります。これは今でも、両方の意見があります。簡単に言うと、アラビア語の音だけで考えると「イスラーム」と伸ばすほうが正確な感じですが、「教」をつけるか、つけないかは、イスラームを語る時に、宗教だけの部分と、宗教に限らない文明や、政治、経済などにかかわる部分のどちらを話題にしているかによります。政治や経済で「教」とつけると変です。「イスラーム教会社」とか、「イスラーム教国家」も何か変な感じです。そのような分野では、「イスラーム会社」「イスラーム金融」「イスラーム国家」「イスラーム文明」というような用法が適切だろうと思います。純粹に宗教的な部分、つまり礼拝や信仰箇条などの部分では、イスラーム教と言ってもいいように思います。

それでは、イスラームとはどのような宗教なのかに入ります。ここに4つだけ、イスラームの特徴をあげました。

第一に、「契約」というものがあります。唯一神との契約があって、信徒とは要するに、契約者の集団である、という発想です。根本教義は、わりと単純なことですが、2つの信仰告白に示されています。一つ目が「ラー・イラーハ・イッラーッラー(アッラーのほかに神なし)」。一神教ですから、そういうことになります。二つ目が「ムハンマド・ラスールッラー(ムハンマドはアッラーの使徒なり)」です。これが2つの根本教義で、この二つを「私は認めます」と公言すると、その人はイスラーム教徒なのです。ほかにルールはありません。この二つの信仰告白をすると「帰依した」と言います。イスラームとは、もともと「帰依すること」を意味します。ですから、イスラーム教徒をムスリムと言うのは「帰依した人」という意味です。

プリントの図で見ていただくと、垂直軸で示されているのは、神との契約ですが、そこでの人間は個々人です。あくまで神との契約は一人一人のことだという考えがあります。その意味では、イスラームには信仰のことは本人の問題でしかないという考えが非常に強くあります。しかし同時に、その契約している人たちが共同体を形成していると考えます。この人たちは互いに

助け合わなければいけません。その意味では共同体がきちんとあって、イスラームは単に個々人のことではありません。両方の面があります。個人であることと共同体があるということと、両方の側面が合わさって、イスラームの基本ができています。

第二に、今申し上げた信徒の共同体を「ウンマ」と言いますが、このウンマが今、人口では16億人ぐらいですが、それが1つの世界共同体とされます。このような観念があるから、「イスラーム世界」が出てくるわけです。クルアーン(聖典)の中にも、これは「汝らのウンマ、単一のウンマである」とか、「信徒たちは同胞(兄弟姉妹)である」と言われています。

この「ウンマ」がキーポイントの一つです。イスラームには聖職者がありません。キリスト教でいう教皇のような存在はいません。公会議もありません。そうすると、たとえばイスラームでは正統と異端がどうなっているかと言えば、正統・異端という言葉もありません。派に分かれる、という意味で「分派」という言葉はあります。では、だれが正しいのかと問うならば、それを決める組織はないのです。何が正しいかがどうやって決まるかというと、ウンマの中で自然にコンセンサスができていきます。私はこれを「思想の市場」と表現しています。市場メカニズムの一種だと思えばわかりやすいのではないかと思うのですが、ウンマが一つの市場となっていて、ウンマの中でいろいろな人がそれぞれの意見を言います。法学者、イスラーム的知識人などが、いろいろな意見を言うと、ウンマの中で評価が次第にできてきて、その中でだれが多く支持を受けるのかが、ゆっくり決まっています。現代は、かつてあったコンセンサスの一部が崩れたり、揺れている時代です。近代になって西洋的なものが入ったためもあります。いずれにしろ、ウンマの中でゆっくりと論争や話し合いが続いていって、次第に決まっていくのです。乱れたからといって、何か教会組織みたいなものが出てきて、エイヤッと決める仕組みはありません。コンセンサス形成の場としてのウンマがあると言うことができます。

第三は、開祖ムハンマドです。ムハンマドは、「模範としての預言者」で

した。「ムハンマドという存在」を要約すれば、「血筋のいい生粋のアラブ人、アミーン(誠実者)、家庭人(夫・父・祖父)、商業従事者(妻が商人)、預言者、宗教指導者、統治者・政治指導者、立法官、仲裁者、司法官、外交官、戦略家・戦士」となります。

出自は、血筋のいい生粋のアラブ人で、7世紀に活躍しました。若いときはアミーン(誠実な、正直な人)というあだ名でした。それから、家庭人として暮らしました。結婚して、子どもができて、後では孫もできます。生業は商業に従事していました。奥さんが大商人でしたので、ビジネスもやっていました。それから40歳のときに預言者と名乗り、宗教指導者となり、やがてイスラームの共同体を立てて、国家をつくりました。国家では、当然ながら統治をしましたし、政治指導者の役もしました。それから、いろいろなルールを決めました。仲裁者というのは、共同体のメンバーを仲直りさせる仕事で、強制力はありません。司法のほうは裁判ですから、判決には決定としての重みもありますし、執行されます。それから、イスラームは国家を造りましたから、外交もやりました。さらにイスラームに反対する勢力との戦いもありましたので、戦略も練りましたし、自分で剣を取って戦うこともありました。

ムハンマドの事績はヨーロッパのキリスト教からいっても、あるいはアジアの仏教からいっても、宗教者のイメージには合いません。妻もあるし、子どももいますし、預言者になっても世を捨てたりしません。宗教者というと禁欲的なイメージが強いかもしれませんが、イスラームでは必ずしも禁欲を推奨しません。ムハンマドという人は、いわば何でもやりました。生活も宗教も、政治も、戦いすらもありました。模範であるということは、すべてに模範を示す必要があります。したがって、何でもやったということになります。実は、農業は欠けています。商売はやりましたが、農業はしていません。ただ、マディーナの弟子たちは農民でした。したがって、イスラームの中には農業の感覚もあります。オールラウンドな存在が、イスラームの預言者のイメージです。

そうしますと、現代のイスラームを考えると、なぜイスラームは宗教と政治を一緒にするのか、なぜ政教分離に反対するのか、という疑問がいつも出されます。私は政治を説明するのが仕事なので、延々とその論議をしていますが、面倒な議論はせずにムハンマド時代に戻って考えると、すぐに答えが出ます。イスラームはムハンマドを模範にする教えですから、ムハンマドの模範はこのとおり、ここまでが宗教、ここまでがビジネス、ここまでが政治と分かれるようにはなっていないことがわかります。

そのように人間の生活、あるいは社会をトータルにとらえようということのできているのがイスラーム法(シャリーア)です。これを「問題解決型の法」とする言い方があります。イスラームが始まって東西の各地に広がって、その傘下にいろいろな民族が入ってくる。その中で世界標準として発達するのですが、問題があるたびに解決策を示していく方式なのです。法学者が解釈をしますので、日本の法律のように国会で第1条は何、第2条は何というふうに決めるものとは違っています。問題があると解決策をつくる。それが拡大し、発展し、たいがいの問題はそこに解決策が見つかる、というような法体系なのです。これが聖典クルアーンと預言者ムハンマドの模範をもとにして作られ、国境を越えていくわけです。しかも、ウンマの法ということで、国家の法ではありませんので、人間に付着しています。これを属人主義と言いますが、現代の国家の制定法は属地主義ですから、現代で摩擦が起こる1つの理由がここにあります。イスラーム教徒から見ると、イスラーム法は信徒とともにどこにでも付いていきます。日本に来たから、お酒を飲むのはもう自由だとはなりません。お酒がいけないというのなら、どこに行ってもいけない。ところが、私たちが親しんでいる法体系は、今は完全に属地主義です。ある国の領土に入ったら、その法律が適用されます。そうすると、国ごとに領土で施行されている法があって、イスラーム法は領土を越えていくとなると、場合によっては摩擦が生じます。

かつては、イスラーム諸国も西洋的な近代法を取り入れる方向にありました。近代化にともなって宗教がだんだん内面的なことになり、世俗化すると

いうことも起こりました。ところが、イスラーム復興が過去30～40年の間に起こりました。

プリントのイスラーム復興の概念図は、イメージを伝えるためのおおまかなものです。左の目盛りは「イスラーム度」と書いてありますが、イスラーム的である度合いという意味です。イスラームの度合いはどうやってはかるのか、当然の疑問があると思いますが、はかれないこともないのです。たとえばモスクの建設は統計があります。だいたいアラブの国を見ていると、国にもよりますが、60年代、70年代ぐらいから、モスクの増加が数字で出てきます。ふつうに考えるとモスクが増えて、礼拝する人が増えればイスラーム度が上がっていると見てもよいかと思います。しかし、どのくらいモスクが増えればどのくらい度合いが上がったのかと問われると困りますので、あくまでイメージとしてお考え下さい。

一番初めのあたりは1800年と書いてありますが、19世紀初頭くらいまでは誰が見てもイスラーム社会と言えたと思いますが、それがだんだん西洋化して、近代化して、宗教の重みが下がっていきました。ナショナリズムの隆盛というようなことも起こります。下降した線がぐっと逆転をし始めるのが1940年代、50年代、60年代のあたりです。上側の線はイスラーム復興運動ですが、自分たちの社会は本来イスラームなのに、こんなことでいいのか、イスラームを復興させなければという運動が生まれました。イスラームの度合いが下がったことに危機感を持って、そのような運動が強まります。その運動が社会の中のイスラーム度を引き上げる。モスクがなくなってきたから、モスクを建てようというように。このような運動もありますが、社会全体がどんどんイスラーム的でなくなってくるので、運動も引っ張られて下がっていきます。だんだんイスラームが弱まっていく中で、なんとかイスラームを復興させようと努力しつつ下降していきます。それが20世紀の半ばぐらいのところで底を打って、また盛り返して、イスラームが復興してきたというのが今の状態です。

イスラーム復興はいつまで続くのかという議論があります。私の考えでは、

いつまでも続くわけではありません。イスラーム復興はいろいろな分野で起こって、やがては日常化します。「復興」とは、いろいろな比喩が可能です。眠っている人が覚醒するとか、病気の人が治るというイメージで復興を考えると、病気がどんどんよくなって、健康を突き破ってさらによくなるということはありません。普通のイスラームの社会でいいわけですから、いつまでも復興を続けようというのはおかしいことで、いつかは必ず日常化して、復興は終わります。どこも普通になってしまう段階は、もう少し先かもしれません。

このイスラーム復興が過去40年ぐらいの間にずっと起こっているのを見ると、イスラーム復興の五大現象があります。いろいろなところを調べて、あるいはいろいろな研究者が言っているのを取りまとめて言うと、イスラーム復興しているところでは必ずこの5つが起こるというのが、私の主張です。ほかの現象もあるかもしれませんが、この5つはどこにでもあります、という5つです。

1番がモスクと礼拝です。イスラーム復興があれば、どこでもモスクが増えます。モスクはいっこうに増えないけれども、誰もがとてもイスラームを頑張りたい気持ちになっている、というようなことは起こりません。どこでも、イスラーム社会の中でイスラームに貢献したいと思うと、気持ちがモスク建設に向きます。各国では都市化が起こって、新興住宅地ができています。高級マンション群に最初はモスクはつきりません。地方出身者が都市に流入して、貧困地区を形成することがあります。そういうところでも、モスクはありません。どちらでも、礼拝をちゃんとしたいと覚醒する人が出ると、とたんにモスクが必要だという議論になります。そうすると、都市化の中で、富裕な地区でも貧困層の地区でもモスクを建てる現象が起こります。

2番目は、貧しい人を助けましょうという喜捨、アラビア語でザカートと言いますが、貧しい人のためにお金を出しましょうという動きが出ます。ザカートを喜捨と訳すのは、理解を助ける面と遠ざける面とあります。喜捨は、もともと仏教用語です。喜んで捨てる、差し出すという表現です。ところが、

イスラームの考えでは、ザカートはそういうものではありません。ビジネスで儲けたとします。儲けた富の中には貧しい人の権利が最初から入っているということです。その取り分を返せ、というのがザカートなのです。これは宗教的にいうと「神の取り分」と言いますが、実際には、貧しい人に分配する分です。喜んで捨てるというのは慈善、あるいは執着を捨てるという面を持っているかもしれませんが、最初から支払い義務があるのであれば、喜んで捨てるのではなくて、喜ばなくてもいいから出しなさいという話になります。実際問題として、イスラームでは、ザカートを差し出す時に、信仰心が強いとか弱いとか、偽善の気持ちで出すなとか、そういう議論は全然ありません。出す義務の分だけ出しなさいという発想です。

非常にプラグマティックだと思いますが、そうやってお金を集めて、福祉活動に使います。貧しい人を助けるのが目的です。イスラーム復興に福祉活動はつきものです。よくあるのはモスクを建てると同時に、福祉活動をする。昔のモスクはよく隣にマドラサ(学院)を建てましたが、今はモスクができたなら、隣にはクリニックです。貧しい人のための病院、診療所をつくって、お医者さんたちがボランティアで来ます。そのようなクリニックでは、薬代はふつうの病院の4分の1です。

3番目は、マッカ巡礼です。最近は毎回300万人、400万人になっていますが、マッカ巡礼では年に一度聖地に巡礼に行きます。巡礼月はイスラーム暦12月ですが、さきほど申し上げたように、イスラーム暦は太陽暦に対してだんだんずれますので、太陽暦では今年は11月にあたります。この時、マッカに全世界から信徒が集まってきます。国際ニュースを聞いていると、イスラームはテロと関係があるのですかというような議論につながりますが、すぐにテロの話をするのは、こちらの関心事です。逆に、イスラーム世界の人が何が何を気にしているか見ると、テロはいけないとか、いいとかを議論的にしている人はほとんどいません。ふつうの人の関心事は、いつか巡礼に行きたいと思っています。巡礼は一生に1度の義務であると同時に夢なわけです。お金をためて、何とか巡礼に行きたいと願っている。だからこそ、毎

年300万人、400万人という数になるのです。ここに現れているのが、実際の復興だろうと思います。

第4は、イスラーム銀行です。イスラーム銀行は「無利子金融」がモットーの銀行です。35年前に始まったときには、「無利子金融」すなわち利子をとらない金融ですから、おおかたの人が批判的でした。無利子の金融とは言語矛盾ではないかと批判していました。資本主義では利子がなければ金融は成り立ちませんので、無利子金融は「開かないドア」とか「飛ばない飛行機」のように言語矛盾だと批判されていたのですが、実際はそうではありません。簡単に言うと、利子はお金を借りた人が成功しても失敗しても取るものだから「利子」と呼ぶのだと言います。成功したときに、利益を分配するのは利子ではないのです。その背景には、お金を貸す側が元利保証でいつも安全圏にいて、事業家はリスクを全部負うというのは不公平だという考えがあります。したがって、リスクを公平に負担して、儲けたら分配するのであれば「無利子」だということで、お金を貸して利益をあげていけないわけではありません。

最初は懐疑的な目で見られていましたが、イスラーム銀行は非常に成功しました。今のイスラーム金融の規模は、いろいろな推計があります。8千億ドルから1兆ドル程度という数字も出ています。世界の金融資産からいうと1%ぐらいです。1%というと、多いのか少ないのか、たいしたことがないような気がするかもしれませんが、金融資産はだいたい先進国にあります。途上国が持っている金融資産だけを考えると、その中ではかなりシェアが大きいと思います。1兆ドルというと、たとえばロシアのGDPぐらいの規模の話をしていますから、決して小さいとは言えません。イスラーム銀行は現在、世界に400行以上あります。35年前には1つしかなかったわけですから、大変な伸びだと思っています。

5つの最後が、イスラーム政治です。これはモスク建設やマッカ巡礼と違って、どこでも見られるわけではありません。イスラーム銀行があるからといって、政治運動がおきるとか、過激派が登場するというわけではないのですが、

出るところでは出ます。どこに出るかというところと社会矛盾があるところです。イスラーム復興が起こる前からいろいろ反体制運動があったところは、イスラーム復興がおきると、それに合わせてイスラーム風に表現するようになります。中東政治をずっと見ていると、40年前でしたら「人民の解放を」と言っていたのが、このごろは「イスラームの正義を」と言うわけです。

今、5つをこういう順で申し上げたのは、この順に現れるからです。モスク建設は必ずどこでも出ます。喜捨や、喜捨に基づく福祉活動も必ずどこでも出ます。巡礼熱の高まりもどこにでも出ます。イスラーム銀行は、ずいぶんたくさんありますが、必ずどこでもとは限りません。イスラーム政治、闘争や革命は、ずっと少なくなります。ところが、この5つを見ておわかりだとは思いますが、ニュースになるのは逆の順番です。爆弾事件が1発ありましたら、すぐにニュースになります。イスラーム銀行は最近になって、ようやく話題になるようになりました。日本でも注目され初めています。マッカ巡礼はほとんど記事になりませんし、一般の皆さんも関心が薄いと思います。そして、喜捨で互いに助け合っている話はニュースにすらなりませんし、新しいモスクで今日も3千人が平和に礼拝しました、などというニュースも存在しません。このように、メディアで注目を集めるのとは逆の順で、現実のほうは広がっているのです。

このような復興がなぜ起こるのでしょうか。その背景にはイスラーム法の力があります。現代でもイスラーム法がなくならないのは、1つには、イスラーム法は法学者の解釈によって作られているためです。国家が制定したものではありません。トルコは現在の共和国になったとき、イスラーム法を廃止したと言われますが、施行するのをやめただけで、なくすことはできません。つくった本人ではないのに廃止することはできません。法学者の解釈を国家が廃絶はできませんから、イスラーム法が見えなくなるだけです。

いつの時代でも、礼拝をしている人たちがいます。ザカート(喜捨)を差し出す人たちがいます。巡礼に行く人たちがいます。これは国家がイスラームであってもなくても、自分たちでやっているわけです。ということは、イス

ラーム法は普通の市民が自分で実施する法ということです。戒律を守れと言うお坊さんもしませんし、教会ありませんが、みんなで守りましょうと言って実施しています。

もう一つは、家族法の力です。法の近代化、世俗化といって、たいていのイスラーム国で西洋法の導入をしましたが、どこでも家族法が残りました。家族法は結婚、離婚とか、遺産相続を管轄します。イスラーム圏の国では、イスラームだけではなくて、ほかの宗教もみな宗教に基づく家族法です。つまり、キリスト教徒はキリスト教の法に縛られますので、結婚はあっても、離婚を認めないことが多いのですが、イスラームならば結婚も離婚もあります。インドネシアに行っても、基本的に家族は宗教の管轄下になっています。日本では、家族は宗教と関係がありませんので、家族法の事情はわかりにくいのですが、これが宗教を支える一つの基盤なのです。イスラームだけではなくて、どの宗教も、結婚は基本的に同一宗教の人としなさいと教えています。家族が宗教に立脚しているとなると、家族が続く限り、宗教文化も続きます。

しかしそれにしても、強制されているわけではないのに、なぜ宗教性がなくならないのかという疑問があります。どうして宗教をやめないのだろうかという疑問は寄せられるだろうと思います。バイタリティーの源泉は何か、ということです。1つは、イスラーム世界がここ30年ほど、ぐっとせり上がってきたということがあります。さきほど申し上げたように、20世紀の半ばぐらいまではイスラーム度が下降して、アジア・アフリカの時代でした。どこの国も独立をする時に、イスラームなんて言いませんでした。アジア連帯、第三世界、非同盟運動と主張していましたが、それが20世紀後半に変わってきました。

現在は、国際金融危機の後になって、G7、G8はもう終わりで、これからG20の時代にはいりました。これは非常に大きな転換点だと思います。G20の中にインドネシア、サウディアラビア、トルコが入っています。このような国際的な場にイスラーム国が入ってきたのは初めてです。トルコは

世俗国家ですので、イスラーム国に数えるのか疑問の方もいると思いますが、私は最初に申し上げたように、「アッサラーム・アライクム」が通じればイスラーム国だと言っているという考えです。トルコは確かに国家は世俗国家ですが、社会はイスラーム社会だろうと思います。おおきな括りで言った時はトルコも含めてイスラーム圏に入るわけで、そのような国が3つもG20に入っているのは非常に大きな意味があると思います。

オルタナティブとしてのイスラームを考えますと、近代西洋文明も今は限界にきているし、社会主義も限界性を露呈したわけですし、今のような米国風のグローバリズムの強者一人勝ちの道も問題があります。その中で、イスラームが違う道を示している、代替案に示しているという面があります。なぜ、そういう力を持っているかと考えると、4つのことが言えるように思います。

1つは、理念がシンプルということです。イスラームがこれだけ広がっているながら、同じイスラームと言えるのは、単純な構成をしている強みではないかと思います。2つめは、聖職者がいない、教会がないということです。ある意味で自由だということです。さまざまな意見があって次第にコンセンサスが作られるということを申し上げましたが、これにもいい面があるだろうと思います。3つめは、両極対応ということです。要するに、イスラームの中にもいろいろあって、その中には、近代とか非近代とか全く関係がない、精神性が大事だというイスラームもありますし、逆に近代文明とイスラームを統合することが重要だというイスラームの主張もあるわけで、どちらの極に対しても対応力を持っているだろうと思います。4つめは、イスラーム復興をずっと観察してきて思うことですが、二重底の強みということです。イスラームはやはり宗教ですから、この世の人生で一生懸命努力して、さらに成功しなければいけないというルールはありません。一生懸命やればいいのか、失敗しても来世があるという考え方があって、それは大きな強みとしてあるだろうと思います。

トータルに言うと、イスラームはソフトパワーだと言えます。ソフトパ

ワー、ハードパワーという考え方だと、ハードパワーは経済、政治、軍事の力です。イスラーム世界のハードパワーはそれほどではありません。イスラーム諸国会議機構には57の国が入っていますが、その経済水準の平均値をとると発展途上国全体の平均値より低いのです。言いかえると、イスラーム諸国には貧しい国が多いということです。大きな産油国もあるし、マレーシアのように経済発展している国もあります。トルコも今、大きく発展していますが、そのような国がある一方、全体としては貧しい国が多い。今日の世界は経済力がものをいうわけですから、この経済的な水準でいて、また政治力もそれほど強くないのに、この存在感は何だろうかということになります。その答えは、ソフトパワーということになります。文化、精神力、宗教的価値といったものが現代に生きているから力があるとみなくてはなりません。イスラームには軍事同盟ありませんし、ハードパワーとして覇権があるのではなく、ソフトパワーとして広がっているのだと思います。

次に「日本にやって来たイスラーム時代」をお話します。在日のムスリム数は統計がありません。在日の外国の方の統計も国別統計はありますが、宗教統計はとっていません。推計値は、国別の数字を集めて、その国の宗教人口の比率を掛けて概数をはじき出しています。その推計で、おおよそ10万人ぐらいと言われています。1960年代には大体千人ぐらいだったのではないかとされます。出身国で言うと、日本の場合、パキスタン、インドネシア、アラブはエジプトが目立つでしょうか。一時は、バングラデシュ、イランからもおおぜい来ていて、30万人ぐらいになったことがあります。今日本にいらっしゃる方の基本的な目的はビジネス、留学、国際結婚です。

私は、ヨーロッパのイスラーム復興も調べてきましたが、主としてイギリスをフォローしています。非イスラーム圏のイスラーム復興にもいろいろあって、国ごとに違います。イギリスは多文化共存主義でやってきましたが、今、ムスリムは全人口の3～5%ぐらいと言われています。これも宗教統計がないので、推計値です。大英帝国だった時代の支配地域からの移民が主流です。今のインド、パキスタン、バングラデシュ、アフリカの国々などから

来た人が多くいます。50～70年代にたくさんの移民がありました。私は70年代の終わりぐらいから時々行って調べているのですが、最初の頃はモスクが全国で数十でした。21世紀に入る頃は2千を超えました。今年行ったときに聞いたら、「数千かな。ちょっとわからない」というぐらいの感じで、3千～4千に増えているような印象を持ちましたが、統計に詳しい方に聞けなかったので、かたい数字として2千以上と申し上げておきます。

日本のモスクは90年代までは、基本的に東京と神戸だけでした。東京には東京ジャーミイという、とても華麗な2000年に再建されたモスクがあって、観光の名所にもなっています。そのような大きなモスクのほかに、地域でマンションを買ってつくる、駐車場やコンビニエンスストアの跡を改修するといった、地域のコミュニティーベースの礼拝所がどんどん増えていて、今は60～90と推計されています。印象としては、イギリスに30～40年ぐらい遅れているという気がします。つまり、移民がベースにあって、だんだん定着して、家庭を持っていく、それからモスクもだんだん増えていくという過程です。ムスリムが増えれば、必ずモスクが増えるというのは、イスラーム圏でも、非イスラーム圏でも同じだろうと思います。

日本でのイスラームとの文化接触とか、文化摩擦ということですが、一番大きい問題は「郷にいれば郷に従え」という属地法の発想です。さきほどから申し上げているように、イスラームは人に付着して、属人的にイスラーム法が広まります。逆に言うと、イスラーム圏でもイスラーム教徒ではない人はイスラーム法に何にも従う必要はありません。属人的な戒律から言えば、ムスリムは日本に来てもお酒を飲みませんので、「郷にいれば郷に従え」方式でお酒を飲ませようとする文化摩擦になります。イスラーム圏から来る人は、自分たちの教えは世界宗教ですから世界どこに行っても変わらない、という認識があります。

よく起こる例として、学校給食があります。給食の中に豚肉が入っていると食べられないという問題です。20年ぐらい前までは、わりと耳にしたのは、イスラーム圏から来た親が子どもの学校でそれを言うと「そういうわがまま

を言っではいけません」と叱られた話です。本人はわがままを言ったわけではなく、イスラーム法も自分で決めたことではありませんから、「そういうわけにはいかないんです」と説明しますが、イスラームを知らない先生からは「いやいや、みんなが同じものを食べるのがルールなんです」と言われていました。最近では、イスラームの事情が少しはわかってきたのと、もう一つは、今、子どものアレルギーがむずかしくて、小麦、牛乳、そば粉とかアレルギーがあります。そうすると、イスラーム圏から来た人は豚アレルギーですね、それならわかります、とさっと理解してくれるようです。これが相互理解なのか、単なる紛争回避の知恵なのかわかりませんが、それも含めるとずいぶん改善してきているようです。

イスラーム圏の人たちが日本に来て、イスラームを実際に理解することもあります。さきほどから「ウンマ」や「世界宗教」としてのイスラームを申し上げていますが、たとえばインドネシアの方が自分の国にいて、世界宗教だと思うかと言えば、それは教科書的な知識で、実体験ではありません。ところが外国に行きます。日本に来ます。そうすると、エジプトの人に出会う。ナイジェリアの人に出会う。パキスタンやウズベキスタンの人に出会うということがおこります。それがみんな「アッサラーム・アライクム」の世界の人たちなわけです。こういうことで世界宗教だということを実感するので。だから、日本みたいな非イスラーム圏も、イスラーム教徒がやって来てイスラームを真に理解する場でありうるわけです。イスラーム教徒はだれでもウンマを信じているでしょうけれど、実際にウンマが国際的なものであることを体験しているわけではありません。それが日本やイギリスで、イスラーム世界のいろいろな人たちが出会う。戒律を守るために、助け合いも必要ですから、そういうことをしていく中で、だんだん自分たちが一体のものだと実感していくことが起こります。

ムスリムにとって日本のもう一つの問題は、宗教は内面だということです。近代的な世俗社会はそういうものだということかもしれませんが、イスラームは実践主義なので、宗教は個人の内面で勝手にやってくださいというわけ

にはいけないという問題があります。そうすると、たとえば理系の留学生だと実験がありますが、朝晩なく実験をしている時にラマダーン月が来ると大変です。ずっと夜通し実験を見張っているのはいいのですが、断食している昼間は集中力が薄れるということもあって、教授の先生に「それはいかん。断食しなくてもいいじゃないか」と言われて困るというような話を聞きます。日本人もそれなりに宗教的だと思いますが、宗教の型がイスラームと全然違います。イスラームは行為規範を重視して、誰もがやるべき戒律が多いのですが、そのような宗教性は日本では希薄なので、なかなか理解しにくいのだろうと思います。

イスラーム法というのは公的な法体系で、イスラーム世界でどこでも通用するものですから、どこに行っても同じなわけですし、個人がその適用を勝手には変えられないわけですが、その点が日本の社会からは理解しにくい。このような問題について、だんだん接触が深まってくると摩擦になったり、あるいは、そこがわかって共存が可能になったりすると思いますが、まだまだ課題の部分かと思います。

ただ、イスラーム圏から来ている人は、留学生にしてもビジネスマンにしても、私が会った皆さんがほぼ異口同音に言うのは、日本はイスラーム的な社会だということです。どうしてかと言うと、まず、とにかく清潔で、礼儀正しい、勤勉で、約束を守る、それに家族思いだということです。日本的な価値とされているものは、イスラームと同じだと言います。極端な場合、日本はイスラーム圏より立派なイスラーム社会だ、我々イスラーム教徒の方がそれを守れていないくらいだ、と言います。それはほめ過ぎじゃないかと思いますが、そのぐらい日本を高く評価しています。

それから、特に留学生に接していると強く感じるのですが、留学生は日本に勉強に来ていますから、アジアの国である日本が西洋ではないのにこれだけ近代化に成功していることに対する尊敬は非常に強いものがあります。これは単に発展したから尊敬しているのではありません。西洋化して発展するのならお手本になりませんが、日本に来てみると、日本人の価値観は全く欧

米に似ていない、つまり文化やアイデンティティーをきちんと持ち続けることと、科学技術が発展することが両立しているのがすごいということです。日本でこういう発展が可能なら、イスラームの国でもイスラームと発展を同時に実現することも可能だろうと。100年ぐらい前だと、イスラームは遅れている、イスラームを捨てないと発展しないと、ヨーロッパ人も言ったし、イスラーム圏の中にもそうかと思う人たちもいました。ところが、日本に来てみればそうではないことがわかった、文化的な価値、自分たちの倫理観というものと、工業発展、経済の近代化とは合わせて行きうるとわかったというのです。それを含めて強い尊敬心があるわけです。

総じて言いますと、文化摩擦が生じる部分と、すごく日本が尊敬される部分があります。日本に対する非常に高い期待がある。期待があるわりには、日本側からまだまだ理解されていないという気持ちもあると思います。そのような実態の一方で、日本社会は今、非常に早い速度で変わりつつあります。1つはグローバル化の影響も含めた多様化です。そこで、多文化共生をどう実現するかが大きな課題になってきています。それから、世俗化一辺倒の面が経済発展期にはあったと思いますが、今、成熟した社会になって、宗教的あるいは精神的、文化的な価値に対しての再評価が、日本の中でもじわっと広がっていると思います。もう一つは、国際結婚の増加です。イスラーム圏の出身者だけが相手ではありませんが、今、結婚する方の15～16組に1組は国際結婚という状態になっています。日本社会そのものが大変な勢いで変容しているだろうと思います。きょう、主催者の先生からも、日本の中でもイスラームは隣人になりつつあるとご指摘がありましたが、全体としての数はまだそれほどでないにしても、隣人としてのイスラームは着実に出てきています。

イスラームは日本に何を提供できるかと考えてみますと、イスラーム圏は日本と比べて、とにかく元気があります。どのイスラーム国を見ても、とにかく子どもが多いし、結婚力、子づくり力(これは私がつくった言葉です)があると思います。イスラームの戒律の中には、結婚している夫婦以外のセッ

クスは全部禁止という教えがあります。これがどういう社会を生むかという
と、ではみんな結婚しようという方向に走っていくわけです。イスラーム圏
での結婚はむずかしくありません。なぜかという、社会全体で誰でも結婚
するものと思っているからです。日本はそうではありません。結婚は個々人
の問題で、したければしてもいいし、しない人もいくらでもいるよ、という
ことになっています。そのような社会と、結婚はするものだと思
っている社会は全然違います。イスラーム圏では、イスラーム復興が起きて、
イスラームが盛り上がれば盛り上がるほど、結婚力、子づくり力が強まりま
す。

イスラーム社会は、明らかに家族愛が強い社会です。近代社会では人間が
個人化していくという考え方があります。イスラーム圏はこれにはっきりと
抵抗しています。人間は個人になって、原子のように孤立化していくのでは
ない、人間は家族なんだと言い張っている。なぜなら、イスラームのお教え
にそうあるから、と言うのです。

変容する日本の中で、イスラームとの関係でこれからの課題が何か、私が
思っていることを二、三申し上げて終わりたいと思います。

1つは、隣人の宗教になってきたという問題です。10万人というのは、
そんなに多い数ではありませんが、少なくともありません。だんだんつきあい
が出てきています。その時、イスラームの文化の中には、ある意味で非常に
固い部分があります。日本に来たからといって、お酒も飲むし豚肉も食べま
すとはならない。「郷に従わない」面があると言ってもいいと思います。日
本の異文化理解を考えると、イスラームとどうつき合うかには、むずか
しい問題も含まれているだろうと思います。いわば、イスラームは日本の異
文化理解、多文化共生のリトマス試験紙みたいなところがあるのではないで
しょうか。

日本社会とイスラームが調和するためには、日本理解とイスラーム理解の
両方が必要です。私たちがイスラームを理解するということも必要ですが、
イスラーム圏から来た人が日本を理解することも必要です。理解したからと

いって、合わせる必要はないかもしれませんが、理解なしでいれば摩擦が生じるわけですから、お互いに理解する必要があります。これだけグローバル化が広がっている上に、イスラーム圏がもう間もなく世界人口の4分の1に達する状況ですから、日本が国際社会とつき合う上で、イスラームとの付き合いも抜きにはできないところに来ています。日本の国際社会との付き合いは、ずっと歴史を通じて欧米と中国が主でした。ところが、その国際社会自体がG20に象徴されるものによって変わってきています。その新しい国際社会とどうつき合っていくのかが、大きな課題だろうと思います。

最後に、日本におけるイスラームですが、さきほど申し上げましたように、留学生でも、ビジネスの方でも日本に来ます。来るまでは、自分たちがイスラームと思っているイスラームを信じています。当たり前といえば当たり前ですが、つまりお国柄があるわけです。イスラームには統一性もありますが、多様性がありますから、お国柄というべきものがあります。お国柄がある人が日本に来て、いろいろなイスラーム圏の人と出会ったときに、お国柄ではないイスラームも生まれてきます。そうすると、日本にイスラーム圏からいろいろな人が来て、イスラームがだんだん日本の宗教の一部になっていくときに、世界に共通のイスラームなのか、出身の皆さんのそれぞれのイスラームなのか。それを私は「本国風のイスラーム」と表現していますが、どちらが強くなるのかは、日本がつき合うイスラームが何かという点で、一つの大きな問題だろうと思います。

それで共存のベースは何かと考えると、それは最終的には世界的に共通で、かつ日本に合ったイスラームというものではないかという気がします。「日本に合った」というのは、イスラームを日本に合わせて変えるという意味ではありません。しかし、イスラームはそもそも、それぞれの国で「本国風のイスラーム」になっているわけですから、変えてはいけない部分と変えていい部分とがあるのです。変えていい部分というのは、具体的にいえば、たとえば貧しい人に優しくしなさいという場合に、どうやって優しくすると優しく感じられるかは社会によって違うということです。エジプト風の優し

くするやり方、日本風のやり方があるのは当然だろうと思います。そういう面が出てこない、日本の中で理解できるイスラーム、理解しやすいイスラームにならないのではないかと思います。

日本風とは何かというと、一言で言ってしまうと、私は「日本語で語られるイスラーム」だと思っています。日本人のほうにしても、外国から新しく来た人にしても、定住している人にしても、ホスト社会の言葉で会話が成り立たないといけない。その場合に、日本語で話せばいいだけではないかと思う方もいるかもしれませんが、そうではありません。私はずっとイスラームを研究していますが、イスラームを日本語で語るのはかなり大変なのです。いろいろな用語をつくったり、日本語で一番語感の近い言葉を探したり、苦勞があります。独自の考え方を示そうと思って、片仮名ばかりになっても、かえって理解を阻害します。皆さんも経験があると思うのですが、イスラーム関係の本を読むと、片仮名の名前ばかり出てきて5ページで嫌になるということが起こります。私はできるだけ片仮名を使わないようにしていますが、そうすると、どういう言葉がいいのか。さきほど出した例のように、喜捨というとわかりやすいですが、イスラームでは喜んで捨てるのではなくて、義務として返しなさいという発想です。そこをどうやって説明していくか。喜捨といえばわかりやすい、でもそれだとイスラームを説明したことにならない、ではどう言うのか。日本のイスラーム研究も、試行錯誤の連続です。

実はあらゆる文化について、同じことが言えます。日本で今、欧米のことを語るとき、日本語で平気で何でも語られていますが、明治の時代には大変な苦勞があったわけです。欧米で言われていることをどう日本語で言うのか、たくさんの言葉をつくり、ああだこうだと、この言葉がいい、あの言葉がいいと議論し、論争したわけです。いかなる文明とつき合うときも、それは避けられません。そうすると、日本語で話せるイスラームとは、イスラーム圏から来て日本に定住する人にとっても、日本の中でイスラームを勉強したり、研究したりする人、その中にはこれからはイスラーム教徒も少し増えてくるかと思いますが、そういう人にとっても、それは簡単なことではありません。

自明なものとして、できあがっているわけではありません。そういう文化的な努力があってはじめて理解しあえるようになるわけです。

先ほどイギリスの例を申し上げましたが、イギリスと比べて30年ぐらい遅れているという印象を申し上げましたが、この問題を見ると30年どころではありません。英語は植民地化された国で通用していましたから、イスラームについて現地の人たちが英語で書いた書物がたくさんあります。現地の本からの英語への翻訳もたくさん出ています。そのギャップを考えると、日本とイギリス、あるいは英語圏と言ってもいいかもしれませんが、英語圏でイスラームが語られる、あるいはイスラームについて読むことができる量と質と日本とを比べると、まだ50年以上の差があると思います。そのくらい足りない状態です。私のように、イスラームを日本語でどう語ったらいいか、日本語でどう理解するのかということを専門している者にとって、これは大変大きな課題です。30年前は、日本とイスラームはほとんど関係がなかったわけですが、急速に関係ができてきました。イスラームも日本の宗教の一部ではないかと言われるようになった今だからこそ、日本語で語りうるイスラームは、ほんとうにここ10年、20年ぐらいの間に、きちんと解決されなければいけない大きな課題だと思っています。

時間が来てしまいました。ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

— 了 —